

社会開発の再考

青 井 和 夫

わたしは昭和39年11月の『自治研究』に「社会開発の問題点」という題で論文を書いたことがある。その中で主張したかったことは、社会がほんとうに発展するには経済の発展だけでは十分でなく、経済・政治・社会統制・教育が均衡をたもちながら進まなければならないということであった。つまり、1) 経済の成長と分配の公平、2) 政治的独立と政治行政の民主化、3) 国民的統合と連帯の確立、4) 文化の向上と健康の増進という4つの分野すべてに注目しなければならないといったのである。

しかしその後の動きは、「経済開発と社会開発の均衡」ということばは使われていても、その実あくまでも経済開発が中心であって、社会開発は経済開発の残したヒズミやアンバランスの尻ぬぐいをするのがやっとというありさまであった。その結果「公害」問題がクローズアップされるにつれて、あらためて GNP 信仰に疑問がもたれ、公害対策をあわてて立てなければならなくなったのである。そこで本稿では、少し角度をかえながら、社会開発に必要な視点をいまいちど反省してみたい。結論を先取りしていえば、これからの社会開発担当者には、(1) 経済から非経済への視野の多角化、(2) 地球的規模に視野を拡大する必要性、(3) 過去と未来に時間枠をひろげる必要性、(4) 環境破壊から人間破壊の視野の深化、(5) 失われるものに対する反省という5点が要求されていると思うのである。

I 経済から非経済の分野への視野の多角化

まず第1に指摘したいことは、この際やはり経済的分野から非経済的分野に視野を大きく転換しなければならないということである。国民1人当りの GNP が500ドル程度のときには、3倍の1,500ドルにでもなればそれこそ天国でも出現するような気になるものであるが、実際に1,500ドルになってみても、別に生活が豊かになったような気もしないし、不平不満がなくなるわけでもない。数年前、1人当り3,000ドルをこえるアメリカで生

活してみても、「なんだこれだけのことか」と思った記憶があるが、現在のアメリカでは、GNP はさらに上ったにもかかわらず、物価高、人種問題、ベトナム政策のゆきづまり等々から、逆に生活に暗さが加わってきたように思われる。GNP という尺度がわれわれの生活の豊かさを示すのにけっして満足すべきものでないということはこれをみてもあきらかになるだろう。

この点でおもしろいのは、昨年、『朝日新聞』に連載された「くたばれ GNP」という記事である。その中でアメリカの有名な経済学者ガルブレイスは(45年8月30日の記事) GNP の時代は終わったと述べ、その理由として次の4点をあげていた。1) GNP の増大だけでは生産された物の組合わせは全然示されない。2) GNP が増大するにつれて、市民社会に必要な公的な財貨と私的に生産された財貨・サービスとの関係にみられるように、資源の配分はますます悪化する。3) GNP の増大は、生産からくる不経済、消費からくる不経済、つまり環境破壊を増大させる。物価もあがり社会的緊張も高まる。4) GNP の増大は社会の文化や芸術とは関係がない。兵器の生産でも GNP はあがる。同じようなことは都留重人の主張(同9月13日の記事)にもみられる。すなわち、1) GNP 信仰は具体的な社会的目標をもたぬものの信仰であり、目的を失った手段信仰にすぎない、2) 企業によって増加させられた GNP が、そこから出された公害を処理する活動によって、さらに増大するように、無駄でも資源の食いつぶしでも GNP は増大しうる、3) GNP は市場での交換を前提としているので、主婦の家事労働のように生活上重要なものであっても市場価値のないものは GNP の中にはとり入れられない、4) したがって、フローだけではなく、資本概念を拡大し、各種のストックをもってそれにあてなければならないというのがそれである。

では、GNP にかわって社会開発の成果を測定するような尺度をつくるには、どのように考えていけばよいのだろうか。その第一歩は、内部経済(不経済)に外部経

済（不経済）を加えて、社会的費用を考えるカップの考えである¹⁾。企業を単位とする利潤や費用の計算は、それらをいくら加えあわせても地域社会や国民社会の利潤や費用にはならないからである。

しかし、外部経済や不経済を考慮に入れるだけではまだ十分ではない。第2に、物的資産会計以外に人的資産会計を考えるリッカートの考えがある²⁾。物的なものと人的なものがかからみあって企業を成立させているにもかかわらず、いままでの損益対照表には物的なものしかのせられていなかった。したがって、物的資産会計面では黒字になっていても、従業員の人的資産を食いつぶしているのに気づかず、数年のうちに従業員の稼働、怠業、意欲低下、信用失墜などのために、全体として急速に赤字に突入するといった現象もみられた。この点をカバーするには、資産会計に、物的資産会計だけではなくて、人的資産会計という、いま1つの会計を加えなければならない。もしこれが完成するなら、経済成長を福祉向上に結びつける条件、つまり、1) 経済成長によって消費者の選択の範囲がせまめられないこと、2) 所得の不平等が悪化されないこと、3) 人的資産会計と物的資産会計の両面にわたり、企業の個別費用と社会全体の社会的費用が国民経済計算に反映させられること、という3条件³⁾が成立するように思われる。

だが、カップにしてもリッカートにしても貨幣価値に換算しうるかぎりにおいて、これらの要因を考慮に入れるにすぎなかった。これに対して貨幣価値に換算できないものまでふくませようとするものに第3のフィッシャーの考えがある⁴⁾。かれは従来の生産と消費の概念に疑問をもち、人間の幸福のもとになるストックが社会的富、つまり「資本」であり、これを増加させるのが真の「生産」で、これを減少させるのが真の「消費」にほかならないという。このように考えてくると「資本」には蓄積された人工物だけではなく、自然的資源・自然の美・人的資源・科学技術の蓄積まで入ることになるであろう。

この考えをさらにもう一步進めたものに、第4のグロスの「社会システムズ会計」論がある⁵⁾。かれは社会

体系 (social system) の状態を測定するために、ストックの状態を明らかにする構造表とフローの状態を明らかにする業績表の2つが必要であるという。これは社会学の分野で社会体系の分析に構造分析と機能分析が用いられたり、国民経済会計に国民的貸借対照表（ストック）と国民所得勘定（フロー）の2つがあるのと同じである。構造表の要素は、人民・非人間的資源・下位体系・内部関係・対外関係・価値・指導体系の7つからなり、業績表の要素には、欲求の充当・アウトプットの生産・体系への投資・インプットの能率的使用・資源の獲得・準則の遵守・合理的な行動という7つが入れられている。これらの構造要素・業績要素をみても、経済的側面をはるかにこえて政治状況・社会関係・文化的価値までふくませていることに気づくであろう。事実、社会の現状を全面的に把握するには、このような広範な尺度を必要とするのである。

II 地球の規模に視野を拡大する必要性

人間はいよいよ月に着陸することができるようになった。この月着陸の人類に及ぼしたもっとも大きな衝撃は、巨大なロケットの開発でも、数百万の部品から成る精密なカプセルの製造でも、数マイル先の穴に糸を通すことのできるほど正確な誘導技術の成果でもなく、むしろ人間がはじめて月という地球の外の惑星から地球を客観的に眺めることができたという「思想的な大転換」にあったといえることができる。地球上に棲みついているがゆえに、われわれは地球の有限性を頭のなかで想像することはできても、実体的なイメージとしてそれをつかむことはできなかった。ところが、人類がはじめて地球から飛び出して他の天体から客観的に地球をながめられる時代になると、地球は有限であり、大宇宙のなかではケシ粒のようなとるに足らぬ惑星にすぎず、そのうえで30数億の人類が運命を共同にしているという切実なイメージを得ることができるようになった。これが一番大きな人類への衝撃だったと思う。

このような現実をふまえて、ボールディングは経済に対する考え方を2つに分け、1つを「カーボーイの経済」と名づけ、他を「宇宙人の経済」と名づけた⁶⁾。いままでの経済はいうまでもなく「カーボーイの経済」である。なぜこのような変な名前をつけたかといえば、従来の経済観は次のような想定のもとに立っていたからである。すなわち、資源は無限にあり、環境も開かれて、はてし

1) K. W. カップ『私的企業と社会的費用』篠原泰三訳、岩波書店、昭和34年。

2) R. リッカート『組織の行動科学』三隈二不二訳、ダイヤモンド社、昭和43年。

3) 都留重人「高度成長社会の失敗」『朝日ジャーナル』、昭和44年3月23日号。

4) 昭和45年9月13日、『朝日新聞』「くたばれ GNP」にのせられた都留重人の論説による。

5) B. M. グロス『社会システム論』酒井正三郎訳、同文館昭和44年。

6) K. ボールディング『経済学を越えて』公文俊平訳、竹内書店、昭和45年。

なく広い、したがって、どこに廃棄物を捨てようと、天下の大勢に影響はない。無限にひらかれた西部のフロンティアで自由奔放に馬を駆っていたカーボーイの考え方はまさにこのようなものであった。

無限の資源、開かれた環境を前提としたが故に、そこでの経済の効率性は、当然のことながら、できるだけ多く生産して、できるだけ多く消費することがよいということになる。いいかえれば、われわれが生産し消費するフローの量によって経済の効率性を測ろうとするわけであって、GNPによる経済効率の測定こそ、この代表的な例である。

ところが、人類が月着陸に成功した現在では、状況が根本的に変わってきた。外から眺めてみると、地球は有限で、その上に30億をこえる人間がひしめきながら生きている。ちょうど広大な宇宙を飛んでいる宇宙船のなかの宇宙飛行士のように、好むと好まざるとにかかわらず運命を共同にしているわけである。無限だと思われていた地球も小さな有限の宇宙船にほかならないことが明らかになったとき、経済も「カーボーイ経済」から「宇宙人の経済」に変らざるをえない。

宇宙船のなかと同じく、資源が有限で環境も閉じられているとすれば、そこでの経済の効率性は何で測ればよいのだろうか。「カーボーイの経済」のように生産し消費するフローの量（たとえばGNP）によって測ることがナンセンスなことはあきらかである。なぜなら、GNPは結局、消費の量にほかならないから、GNPが増大することは宇宙船内の資源をますます早く枯渇させることを意味しているからである。現に宇宙船のなかでは、排泄した大小便まで、もう一度分解して水と食物に還元し、ふたたびそれを口にすることが必要になってくるし、酸素も炭酸ガスからもう一度再生して呼吸しなければならなくなってくる。だとすれば経済の効率性も、われわれの使い捨ての量ではなくて、有限の資源をどこまで長もちさせるか、有限のストックをどう有効に使うかという点から測定されなければならないようになるだろう。

資源は無限であり、環境も開かれているという前提のもとに立つ「カーボーイの経済」では、経済の成功度は生産と消費の量の増大、いいかえればフローの増大によって測られていた。これに対して「宇宙人の経済」では、資源は有限であり環境も閉じられているという前提のもとに立っていたから、経済の成功度は有限の資源をどれほど有効に使用しているか、いいかえれば所与のストックをどれほど少いスルー・プットで維持できるかによって測られることになるのである。個人単位の合理性は必

ずしも家族単位の合理性ではなく、企業単位の利潤は必ずしも家族単位の利潤ではない。だとすれば国家単位の考え方も人類の立場からみれば、とてつもない非合理的なかもしれない。「GNP世界第3位だ」といっていはることは論外だとしても、「だが国民1人当りのGNPは世界第16位だから、がんばらねばならぬ」という一見謙虚にみえる主張にも、どれほどの意味があるのかと疑いたくなるといえよう。人類は1つであり、異域同舟の運命共同体であるとすれば、たとえ日本のGNPが増大したとしても、朝鮮・中国・ベトナムの犠牲のもとにそれがおきたのであれば、それにどれだけの意味があるだろうか。GNPも時代遅れなら、それを国家単位で測ることも、すでに時代遅れになりつつあるのである。

III 過去と未来に時間枠をひろげる必要性

視野を地球的規模に拡大するということは、思考の時間枠をひろげ、長いタイム・スパンで物を考えることでもある。この点で、短期的直線的な考え方に反対し、「未来の衝撃」への対応策を早急にたてなければならないと主張するものにトフラーがある⁷⁾。

かれは未来生活の大きな特徴を一時性、新奇性、多様性の3つの側面からとらえ、つぎのように主張する。すなわち、科学技術の進歩の結果、社会の変化はそのテンポを加速度的に早め、あらゆるものが「使い捨て」にされ、すべてのものが一時性しかもたないようになってきた。毎年新しい流行が出て昨年度の洋服も靴も使いものにならない。おしめと同じように結婚衣裳も紙でつくられ、使い捨てになるだろう。建築も将来の陳腐化にそなえて破壊されることを計算に入れて設計されているし、「所有」から「借用」の時代に入って、自動車だけではなく、庭木から応接室の画までレンタルになりつつある。また数百万の人間が新しい遊牧民として国内はもとより国際的にも民族の大移動を開始している。このような社会移動の激化は、いわば「場所の使い捨て」現象だといってもよいだろう。すでに使い捨ては、物と場所だけではなく、組織にまで及んでいる。身分的ヒエラルヒー、構造的半永久性、仕事の分業性という3つの特色をもつ現在のビューロクラシーにかわって、平等性・一時性・協力性を特色とする、タスク・フォース中心の自己破壊的で柔軟な組織が出現しつつある。これなど、まさしく「使い捨ての組織」(Ad-bocracy)だといってよい。このような傾向がさらに進めば、「使い捨ての人間関係」にまで

7) A. トフラー『未来の衝撃』徳山二郎訳、実業之日本社、昭和46年。

至るだろう。つまり必要に応じて短期間のうちにきわめて親しい友人になったり、協力の必要性がなくなるとサッサとその関係を打ち切るような人間関係がでてくるかもしれない。レンタルな人間サービス会社から派遣された人間と雇主との間は、そのようなものになりつつある。

つぎに新奇性についていえば、科学技術の進歩は新奇なものを多くつくり出し、知識の量も加速度的に増大した。欠乏の社会から豊富の社会に入るにつれて、物質的価値から心理的価値へ、さらには社会的価値の追及へと人々の関心は変化していく。就業人口の数からいっても第一次産業（農林水産業）から第二次産業（工鉱業）に重点は移動し、現在ではそれが第三次産業（商業・サービス・金融）へうつりつつある。物財からサービスへ、サービスから情報へと価値の所在が変動しつつあるといえてよい。こうしてトフラーは未来産業の中核には、新しい経験と新しい創造性を求める人々のための「経験産業」がいすわることになるだろうという。世界旅行を斡旋するツーリスト・ビューローは、あきらかに新しい経験を与える企業である。音楽を教え、画をかかせ、スポーツをやらせる企業も「経験産業」の1つである。大学への入学、病院への入院、各種の社会的活動への参加も新しい経験への要求をみたすものといえてよい。快楽・スリル・苦痛、都市ゲリラや革命ごっこすら新しい経験として要求されるようになるかもしれない。

このような新奇性が家族生活に及ぶと、従来の一夫一婦ではなく、結婚をしないあるいは結婚を中断している独身者集団、生みの親と育ての親の専門分化、集団家族や同性愛家族、老人結婚、引退後の子どもの養育、一夫多妻や多夫一妻など、種々様々な形式があらわれる可能性がある。フリー・セックスは独身者や結婚者のセックス・タブーをしだいに切りくずし、嫌でも応でも生涯一夫一婦制の枠にしばられるといったことは少なくなるだろう。一生の間に男も女も数回結婚をしないおすようになるかもしれない。

では第3の「多様性」はどうだろうか。工業化の進展は大量生産・大量消費・大量交通（マス・コミュニケーション）といわれるように生活面でも思想の面でも、画一化を強力におし進めてきた。だが、この傾向は永久に続くものではなくて、さらに科学技術が進歩すればこんどは逆に多様性をうみ出すようになるだろう。オプションの増大によって、皆がそれぞれちがう服を着、ちがう自動車にのりうるようになるかもしれない。こうなると各人は生きがいを求めてさまざまな文化集団に所属するようになるだろう。たとえば若者ゲットー、ヒッピー集団、

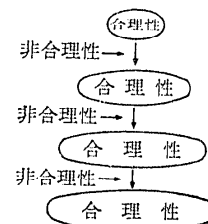
ゲイ・ボーイ、無数の趣味同好会、スポーツ集団、はては体制打ちこわし集団にいたるまで。階級・階層・性別をこえた「生活様式」別の文化集団がもっとも重要な所属集団になるかもしれないのである。

このような「一時性」「新奇性」「多様性」への社会変動が現代の特色であるが、それが一定の限度をこえると人間の適応の限界につきあたる。トフラーはこれからの社会問題の中心に適応限界をこえる「未来の衝撃」をすえ、それへの対策として、技術中心主義（物質中心、短期的計画、ヒエラルヒー的組織）の死を宣言し、物質的福祉中心主義に対しては新しい社会指標に基づく人間性回復政策を、短期的計画に対しては、社会の各階層・各職業を代表する人々の間で未来のユートピアと反ユートピアを実験してみる長期的試みをあげている。そしてヒエラルヒー的組織に対しては、あらゆる人々が陪審員となって参加する「社会的未来集会」を、職場で、地域で、学校で無数につくりあげてことを提唱している。

たしかにトフラーの主張は過去と現在にとらわれているわれわれの思考の枠を、遠い未来までひろげることによって来るべき「未来ショック」を防止しようとする1つの試みである。だが、かなり現在の自由経済と科学技術への楽天的な信仰にささえられていて、問題を変化のスピードにだけ置いているように思われる。

トフラーにくらべると、マルクスやウェーバーの思想は、はるかにスケールが大きい。たとえばウェーバーの歴史観は、人類の歴史を合理性の拡大する過程としてとらえ、それをおし進める動因を「利害関心」と「理念」に求めた。利害関心（たとえば経済）は原動力であり、理念（たとえば宗教）はそれに方向を与えるものである。したがって、合理性の拡大は直線的連続的にのびるのではなく、狭い合理性から広い合理性への変化は非連続的な飛躍であり、そこには「非合理的なファクター」の介在を必要とするのである（第1図）。科学技術や経済の発展によって、合理性が連続的に拡大するのではない。いわば「非合理的」と思われるようなファクターによって従前の合理性がいったん否定された後にはじめて、新

第1図 合理性の拡大と非合理性



しいより広い合理性に質的に飛躍するのである。非連続の連続という弁証法的な過程がそこにみられるのである。

おそらく狩猟・採取を中心とする「自然社会」から栽培・飼育を中心とする「半農業・半牧畜社会」への転換は人間の社会の第1の危機の時代だったにちがいない。そして生産力が高まって階級が分裂し、都市や国家の発生によって、人間の生活が第一次集団的地域共同体から第二次集団に拡散する「農業社会」の発生期が第2の危機であった。この時代に世界宗教が発生している。そして「農業社会」から「工業社会」への脱皮が第3の危機で、これがいわゆる産業革命といわれるものであった。このときにはプロテスタンティズムの倫理が合理性の拡大に触媒的機能をはたしている。だとすれば「工業社会」から「脱工業化社会」への飛躍にも、現在のわれわれからみれば、きわめて非合理的な理念が介在しなければならないのではないか、工業化社会はすぐれてナショナリズムの時代であった。脱工業化社会はおそらく「人類社会」の時代であろう。国家や民族単位のアナリズムから人類的ヒューマニズムへの飛躍は経済や技術の発展だけで自動的に実現されるものではない。そこでは人類がどうにももうごきのとれない危機にみまわれ、大混乱状態に投げこまれたあげく、一念発起し思いきって飛躍を試みる「非合理的決断」を必要としよう。

このように考えてみると、ウェーバーの「周辺革命の理論」、つまり新しい文明は従前の文明の中心部ではなくて、中心をずれた周辺部に発生するという主張が重要性をおびてくる。新しい文明は、バビロニア、エジプト、中国、インド、中東、ギリシャ、ローマ、西欧とつねにその中心点を移動させてきた。そして現代文明の中心はすでに西欧からアメリカないしはソ連に移動しつつある。だとすればこれからの新しい文明の中心はどこになるだろうか。「中国だ」とか「第三世界だ」とか「日本だ」という声がある。それは分からない。だが西欧やアメリカでないことだけはたしかである。

いずれにせよ、われわれはここ数百年の過去や未来ではなく、数千年のタイム・スパンでもう一度過去をふりかえり、未来を展望する必要にせまられているといっ

IV 環境破壊から人間破壊への視角の深化

しかしわれわれの視野を過去と未来に向けるだけでは十分とはいえない。外の世界もさることながら、われわれの内の世界が大きな危機にみまわれているからである。最近、環境破壊が大きくさげば、公害に対する関

心が急速に高まってきた。社会的責任をとろうとしない企業の利潤中心の思想、「私害」まで「公害」として処理しようとする政府・自治体の考え方、被害者が同時に加害者でもあるメカニズムにとまどう組合や一般住民、自然の征服と掠奪にのみ目をむけて地球の生態系を破壊しつつある科学技術、こういった重要な問題に対し、われわれに大きな反省をせまるものとして、公害の問題は重要である。にもかかわらず、人類が公害によって滅亡するとは思われない。公「害」だとか環境「破壊」と意識されているかぎり、人類はなんらかの対策を見つけて出すものと信ずるからである。

問題はむしろ、われわれが「害」だとか「破壊」だとか「退歩」だと考えていないものにこそある。もっともおそろしい陥穽は、人類がこれこそ「進歩」だと考え、疑いをさしはさまない方向に、よこたわっているといえよう。いままでわれわれは、生活が「快適」になり、「便利」になり、「快楽」が増し「満足」を高めることはよいことであり、人類進歩のあらわれだと考えていた。GNPが上り、自動車が増え、収入が増すことは良いことであると信じ、疑ってみることさえしなかった。しかし、はたしてそれは良いことなのだろうか。昨年なくなられた文化人類学者の泉靖一氏はよく「人間は文明によって飼育された動物だ」といっておられた。ちょうど豚が、イノシシからつくられて人間に飼育された結果、人間を離れては生きることができなくなっているように、人間も文明という外被に保護されて飼育された結果、文明から離れては生きることができなくなりつつあるのではあるまいか。ガスや水道がなければ人間は生きられない。電気がとまれば東京は一瞬にして死の街に化してしまふ。自動車がなくなったら歩くことができず、睡眠剤がなければ夜も眠れなくなりつつあるのではないか。未開民族のなかにとびこんで、裸の生活をしている人々と接してみると、はたして人間は進歩してきたのか、退歩してきたのか分からなくなるのである。

快適・利便・快楽・満足という近代文明の目的そのものに人類の陥穽があるのではないかという考えの裏づけとして、「犠牲者なき犯罪」⁸⁾という現象をあげてもよい。これはいままでの犯罪とちがって直接に他人を傷つけた

8) M. Schur, *Crimes without Victims*, 1965.

婚前交渉の率を年次別に比較すれば、第1表のごとくになって男女とも年々増加している。離婚や再婚に対す

表1 アメリカにおける婚前交渉率の変化

	男	女
1929年 ハミルトン調査	54%	35%
1938年 ターマン調査	61	37
1953年 キンゼー調査	83	50
1965年 ヤンコフスキー調査	81	57

る心理的・社会的抵抗の減少からみて、婚外交渉・婚後交渉の率も同様に増加しているにちがいない。同性愛の増加傾向も否定できない現象であろう。またマリファナ(大麻)、LSDの使用者は500万にものぼり、その大半は大学やハイスクールの学生だといわれている。昨年の暮ニクソン大統領も、ついに麻薬禍について重大な声明を行なうに至った。日本も数年の間に現在のアメリカと同じようになるのではないかとアメリカの社会学者もいる。

フリー・セックスを助長するものに口経避妊薬の使用があげられるが、麻薬使用の原因は何なのだろうか。秋元波留夫氏⁹⁾によれば、つぎの諸原因が考えられるという。その第1は個人的な快楽の追及である。マリファナや大麻はモルヒネやコカインほどの生理的習慣性はないにしても、それを飲むと非常に性感が高まるので、心理的習慣性はあるといわれている。第2に、ヒッピーのように集団的イデオロギーに支えられて社会から脱出し、自分たちだけの別な世界をつくらうとする動きもある。第3に、新しい創造性を求めて画家や作曲家がマリファナやLSDに手を出すことも多い。そして最後に麻薬によって巨大な利潤をうる産業資本や暴力団の影響も無視できない。密売買のルートはだいたいにおいて、かれらによって握られているのである。おそらく公害によって人類は滅びることはないであろう。それよりも内なる敵によってむしばまれる可能性の方がはるかに高い。人間が食うに困らなくなってくると、「生の確証」をしびれるようなセックス、目くらむようなスリル、あっと驚くような冒険、緻密な犯罪、巨大な戦争などに求めるようになるかもしれないからである。

しかし、さらに恐ろしいものがある。それは自然科学、わけても生物科学の発達から、われわれの内なる自然を操作して遺伝子をかえたり、パーソナリティを変革したり、望ましい子を自由に生むことが可能になりつつあるということに関係している。その先鞭は避妊法が発見された時までさかのぼる。これによって「子は天からの授

りもの」という観念が大きくくずれてしまった。現在では妊娠の初期に胎児の性別を見分け、望まない性であれば中絶することによって性別の生み分けと同じ結果をうることが可能になりつつある。もし子の性別をコントロールできるようになれば、どのような影響を社会に与えるだろうか。ハーマン・カーンなどは男女の性比が50:1と非常なアンバランスになるのではないかと心配している。避妊→性別の生み分け→性別のコントロールと進めば、人工授精、人工生殖、ついには遺伝子に手を加えて美人を生む方法とか、頭のよい子を生む方法もあながち不可能ではなくなるかもしれない。老人層の増加から、ますます生命を延長する努力も行なわれるだろう。性格をかえてしまう薬もできるにちがいない。

これら一連のうごきは、われわれの内なる自然に手を加え、そうすることによって人間の価値の原点をつくりかえるという意味において、きわめて重大な結果をまねく。価値の原点がゆるがぬかぎり、われわれは人間の尊厳をおびやかすものに対して、はげしい抵抗を示してきた。だが、その価値の原点が人為的に操作されるとき、つまり抵抗を示すよりも、それに適応するように人間の方がつくりかえられるとき、われわれに何ができるというのだろうか。人間がつくった組織や機械がひとり歩きをはじめ、人間の得た知識が逆に人間を支配することになりはしないだろうか。疎外の極限がここにあらわれるのである。

環境破壊を問題にしている間はまだよい。だが人間そのものの破壊に科学技術の矛先が向ったとき、たとえそれが一見したところ「進歩」のようにみえたとしても、われわれは断乎として、そこに立ちどまる決意をもたなければならない。人間の尊厳のために科学技術の発展を阻止しなければならないのである。

争いによって同類を殺すのは人間だけだといわれる。他の動物は地位の上下を争い、雌を求めて争い、餌物を求めて争うけれども、同類を殺すことはない。ところが人間はイデオロギーのために人を殺し、金のために人を殺し、国家のために人を殺して、はばかりない。つまり本能的行動や適応的行動に終始している動物とちがって、創造的行動のできる人間は「よりよく生きる」¹⁰⁾ことができると同時に「よりわるく生きる」こともでき、自然を征服しうるとともに、自然を破壊することもできるのである。

V 失われたものに対する反省

ここ数年、われわれも大学紛争の真只中に立たされた。

9) 秋元波留夫「現代の精神病理」『図書』岩波書店、昭和45年10月号、11月号所収。

10) 時実利彦『人間であること』岩波新書、昭和45年。

そこで議論されたことは、大学が体制に対する抵抗機関としての機能を失って、体制のための労働力製造工場になりさがってしまったこと、大学が人間差別の大きな機関となり、人間性抑圧の道具になっていること、教師が官僚機構の一端に組み入れられ、人間としての自発性と創造性を失いつつあることなどであった。もちろん、学生の側にも、責任のない気安さから一種のスポーツや遊びのような気持で闘争に参加したものもあり、成人や社会に「甘え」て気ままにふるまったものもいた。「豊かな社会」の青年たちは「欠乏の社会」に育った親たちとはまったくちがった原体験をもっているのだから、考え方や見方の面でもかなりちがってくる。だがそれだけに、親の世代の気づかぬ側面を敏感にキャッチする能力ももっている。かれらは「食うための努力」にはそれほど関心を払わない。何をやっても「食える」ということは、かれらの生活体験からきた自明の理だからである。したがって、「生きがい」を求めて自分たちの理想を「いますぐ、すべての人々に」実現しようと試みるのである。

ハーバード大学のエーソスは「つぎの攻撃目標は大会社か」¹¹⁾という論文のなかで、若者たちの「知識観」の変化をつぎのように述べている。かつての学生は知識は絶対的なものであって、どんな問題にも常に正しい解がある、それを知っているのが教師であり、知らないのが自分たちだ、そこで唯一の絶対的で客観的な知識を教えるのが教師の役目だと考えていた。ところがつぎの段階になると、1つの問題に対する最善解は1つであるが、教師の役目は多数の可能な解を示すことにあり、そのなかから最善解をえらぶのは自分たちだと考えるようになってきた。それがもう一歩進めば、絶対的な知識などを持ちあわせている人間はいないのであって、各自が自分の価値観に基づいて自分の考え方と現実との適合性を決定しなければならないと考えるようになってくる。しだいに知識の絶対性がゆらぎ、不安定になってくるのである。

同様に世界観も感覚的なものから、理性的、機械論的なものを経て確率論的なものに変化し、現在では世界は一義的には定義できない構造をもつものと考えられるようになってきている。権威の源泉も、地位から人間へ、業績から人間的配慮へ、知識の量から価値の質へと変化しつつある。一言にしていえば、価値観が量から質へと大きくかわろうとしているのである。エーソスは企業体を例にとりて新旧の価値観を第2図のように対比してい

第2図 新旧の企業組織観

価値観 (目標)	容体的(旧)	主体的(新)
	量	質
構造	集約的 永久的	分散的 一時的
幹部方針	閉鎖的 硬直的 権威主義 地位 絶対的	開放的 柔軟的 参加 人間 相対的
人事管理方針	画一化 同一化 同質化	個性化 変異化 異質化
人間観	物的 知識 外部指向 原因 外面的	人間的 思考、感情 内部指向 理由 内面的

る。

欠乏の社会に生まれた親の世代と、豊富な社会に生まれた子の世代では、生活の原体験がちがうので、人間観・世界観・価値観の面で大きな世代の断層ができあがる。そして社会変動のスピードが増せば増すほど、ますますその断層は大きくなる。しかも若い世代には既得権と責任がないだけに、古い世代の「うそ」に我慢がならず、それを徹底的に追及しようとする。企業体の「うそ」、政府の「うそ」、行政の「うそ」、大学の「うそ」、親の「うそ」、たしかに現代は建て前とほんねが分離して、あまりにも「うそ」が多すぎる。最近も『ニューヨーク・タイムス』のスッパ抜き記事によって、アメリカのベトナム政策がいかに「国家利益」という「うそ」にぬりかためられていたかが明らかとなった。ビールの管理価格、カラーテレビの値段、私鉄の運賃値上げ、すべて「うそ」でないものはない。いや、このような「うそ」によって利潤をあげるのが、経営者の腕というものであろう。公害企業がいかに事実を隠蔽し、それを監督する行政官庁がいかに企業体と癒着していたかも、しだいに明らかになりつつある。ほとんどすべてといってよいほどの代議士が選挙法の違反をしながら、その同じ代議士が、臆面もなく法律をつくっているのはいったい何を意味するのだろうか。そして、それを止むをえぬこととして見のがしている「われわれ」一人一人は、どうなのだろうか。

このように考えてくると、ノーマルだと思っている「われわれ自身」が、はたしてノーマルなのかという疑問がわくのである。われわれはたしかに進歩し、近代化

11) L. A. G. エーソス「つぎの攻撃目標は大会社か」『中央公論』特集秋季号所収、昭和45年。

した。欧米の先進国のあとを懸命に走ってきた。そして GNP ではまさに欧州の諸国に追いつき追いこそうとしている。だが GNP を追いかけているかぎり、たとえアメリカをぬいたとしても、われわれの精神構造はアメリカと少しも変わらないことになってしまうだろう。

だが、いったい「近代化」とは何をさすのだろうか。ある人はそれを経済の工業化だと考える。ある人は政治の民主化だと考え、他の人は社会の都市化（組織化）だと考える。それを文化の合理主義化だという人もある。自由の増大、マス・メディアの普及、教育程度の上昇、使用エネルギー量の増大ととる人もある。これらの現象はすべてが平行的に進むものではなく、工業化は民主化を犠牲にするかもしれないし、教育程度の上昇は社会の組織化と矛盾するかもしれない。だとすれば、これらの諸側面すべてをひっくるめて、近代化を定義づけることができるのだろうか。これに対して、近代化とはオプション（選択の余地）の増大であるといった学者がある。つまり世のなかが進むということは、そのなかで生きるわれわれの選択の余地が広がることにほかならないというのである。

たしかにこれはうまい定義である。しかし、これとでも、ある生活分野のオプションの増大は他の生活分野の減少をひきおこすかもしれない。また全体としてみれば、徳川時代よりも現代の方がわれわれのオプションの余地は大きくひろがっているだろう。だが他方、失われたオプションのあることも忘れてはならない。オプションの増大の面にばかり目をうばわれて、その間に失った面のあることを忘れるとたいへんなことになる。そこでわれわれはいつもつぎのような問を発してみなければならぬ。

1) われわれは人間性を失っていないのだろうか。原始民族や未開民族と比較した場合、はたしてわれわれは、よりうるわしい人間性をもっているのだろうか。もし失ったものがあるとすれば、それをどうしてとりもどせばよいのだろうか。マルクスのいう「類的人間」あるいは「全人」に達する道はどこにひらけているのだろうか。最近、センシティビティ・トレーニング・グループとか Basic Encounter Group（人間的な出会いの集団）といわれているもののねらいは、ほんとうの人間性とは何か、ほんとうの人間関係とはどのような状態をさすのかを自分で体験してみることであった。世の中の「しきたり」や社会的役割にしばられて、あるいは自我の防衛機制の影響のもとに、ガンジガラメになっている人間性をいま一度解放してみる試みにほかならなかった。もちろん人

間性の回復といったものが、こんな短期間の集団的出会いによってかんたんに実現できるものではない。また、人間性の回復はわれわれの所属集団、ひいては社会の変革と表裏の関係に立つものであるから、社会の変革なくして実現できるわけのものでもない。だがそれにもかかわらず、センシティビティ・トレーニング・グループや Basic Encounter Group での体験のなかには、真の人間と真の人間関係の所在をかいまみせてくれるものをふくんでいるように思われる。

2) われわれはかけがえのない体験を失ってはいないだろうか。われわれには自分の体験したことしか分からないので、原体験のちがいで各人のもつ価値体系もかわってくる。われわれ自身もはや江戸時代の農民の生活は分からないし、アフリカの原住民の喜びや悲しみをどこまで真に理解できるかもおぼつかない。こういう私自身、ほんとうのところ大金持ちの生活も知らなければ、どん底の貧乏人の生活も知らないのである。ではなんでも体験しておきさえすればよいかといえ、そうともかぎらない。一度体験したことでも時がたてばしだいに忘れ去ってくるからである。成人は子ども時代の気持ちをもう覚えてはいないし、社長も過去の下働き時代を忘れていることが多い。功なり名とげた人々はその代償として、何ものかをつねに失っているのである。

では、このような失った体験をどうしてとりもどし、はじめての体験をどうして獲得すればよいのだろうか。答えはいたってかんたんである。体験を回復し、体験を獲得する方法は1つしかない。それは実際に体験してみることである。トートロジーのようにひびくかもしれないが、体験してみること以外に体験を獲得するすべはないのである。すなわち、アフリカの原住民の気持ちをほんとうに理解しようとすれば、かれらと同じ物を食べ、同じ家に住み、実際にかれらとともに生活してみなければならぬ。運輸大臣が大臣になる資格をうるためには、実際に満員電車で通勤してみなければならず、厚生大臣は生活保護の体験をしてみなければならぬだろう。間接的に統計資料をながめたり、一時的な視察旅行で「分かった」と思うほど僭越なことではない。いわゆる「下放運動」のねらいこそ、この失った体験をとりもどす1つの方法にほかならなかった。都市の子どもには農村の生活を、農村の子どもには都市の生活を数ヶ月間実際に体験させてみなければならぬ。大学生も国内や外国に出て実際に働いてみなければ、ほんとうに社会を理解することはできないだろう。

3) われわれは主体性を失ってはいないだろうか。われ

われは、やりたくないこともやらねばならず、やりたいこともあきらめねばならない生活を何十年間もつづけている。自発的に思いきって何かやる経験はいたって少ない。子どもたちも家庭では甘やかされ、学校では受験勉強においてたてられて、長い学校生活の間に、自分から計画し、行動し、リーダーシップをとり、協同するといった体験をあまり多くもってはいない。集団生活、芸術的創作、チーム作りなどは算数・国語・英語の勉強によって片隅においやらせてしまっていて、「働くこと」と「愛すること」という生活の原型が教育の場から忘れ去られているように思われる。「働くこと」と「愛すること」、これは本を読んで分かるものではない。また、人に教わって分かるものでもない。ちょうど水泳をまなぶには実際に水に飛びこんで泳いでみる以外に方法のないように、「実践」によってのみ回復しうるものなのである。

もう一度くりかえしてみよう。「失った人間性をどうしてとりもどすか。」「失った体験をどうしてとりもどすか。」「失った主体性をどうしてとりもどすか。」これらの根源的な問に対して、できあいの万能薬などというものはない。というのは、これらに対する回答は、なんらかのテクニックや知識として、他から与えられるものではなく、われわれ自身が悩み、模索し、額に汗してつくり出さねばならぬものだからである。おそらく、われわれ自身が懸命に生きること、心から人を愛すること、死ぬまで勉強すること以外に、それらを獲得する方法はないだろう。社会開発担当者の開発からはじめなければならないのである。

(本論文は1970年10月の講義に少し手を加えたものである)。